

〈資料〉

## 中国語基礎教育におけるテキストの課題と展望

工藤 真理子

(外国語学部中国語学科)

### Problems and Prospects in Textbooks for Basic Education in Chinese Language

Mariko KUDO

(Department of Chinese Language Studies, Faculty of Foreign Language Studies)

目白大学で中国語を教え10年以上が経つ。学生の気質、学力の変化に伴い徐々に指導も変化をしてきた。現在使っているテキストは、中国でよく使われた中国語版の『实用汉语课本』が日本語訳になった『实用汉语课本』であり、それがまた簡略化された『簡明实用汉语课本』である。この日本の大学の語学教育の現状に合わせて簡略化されたテキストは、出版されてから大分経つため、時代に合わなくなっている。その問題点について単語を中心に考察する。授業中に学生から意味が分からないと言われ、説明に苦慮した単語から、学習者の育った背景、また時代の流れを垣間見ることができる。また课文からその当時の物価を類推することができる。上述のテキストを利用して、目白大学の学生にどのように授業をしてきたかという現状を見ながら、今後の課題に言及している。

キーワード：中国語、テキスト、教科書、中国語教育、教材、实用汉语课本

#### はじめに

目白大学中国語学科では、中国語を週に6コマ教えている。学生は、作文（中国語1A、1B、中国語4A、4B）、読解（中国語2A、2B、中国語5A、5B）会話（中国語3A、3B、中国語6A、6B）をそれぞれ週2コマずつ学習する。半期で合計30回、一年間で合計60回の授業がある。なお、中国語1Aから3Bまでは1年生科目であり、中国語4Aから6Bまでが2年生科目となる。Aは春学期科目、Bは秋学期科目である。

3年生になると、選択必修の中国語（プレゼンテーション中国語、時事中国語、検定中国語、通訳ガイド、ビジネス中国語など）を選択し、幅広く自分の興味を持てる中国語を学ぶことができる。

私は、アジア語学科中国語専攻の時から、本学で教鞭をとってきたが、学生の気質、意欲なども時代

に応じて変わってきた。2009年から、読解の授業では『簡明实用汉语课本』を使ってきた。

1期生～3期生までは、中国語に興味があるわけではなく、所謂不本意入学の学生も少なからずいたため、クラス内の雰囲気は、積極的に中国語を勉強する雰囲気ではなく、2008年1月の毒入り餃子事件などの中国に対するネガティブなイメージが先行したためか、4期生は、入学者自体が少なかった、この雰囲気の中でも中国語に興味を持って入ったのだから、やる気はあるという学生の主張と教員から見た学生のやる気は、相反していると感じることが多々あった。その後も長く中国パッシングは続き、日中関係だけでなく、中国語学科も長い低迷期に入った。

最近では、中国人訪日観光客の増加に伴い、中国語の必要性は以前にも増し、また、中国に対するイメージも大分改善されてきた。

また、この様な時代の変化によって、技術、文化も変化・進歩し、テキストの内容が、大学生が生活する上で使う言葉と乖離が見られるようになってきた。記憶に残っているのは、最初の学生には、まだテキストの発音練習としてテープを使っていた。それがCDに替わり、今は音声ダウンロードという時代になっている。

このような学生を取り巻く時代の変化、技術や文化の変化・進歩を踏まえ、特にテキストに着目しながらこれまでの経緯を振り返りつつ、現状と課題について述べる。

### 1. 使用しているテキストの概要

2009年から使用しているテキストは、もともとは中国の北京語言学院(現在の北京語言大学)が作った『实用汉语课本』である。外国人が中国に来て、中国語を習得するときのテキストである。そのため、新出単語の単語、文法の説明は中国語と英語で記述されている。全部で6冊からなり、商務印書館(中国の出版社の一つ)で出版された。出版年は1981年から1990年にまたがっている。1冊目2冊目は、初級の基礎文法を学ぶに最適である。3冊目以降からは応用中国語となり、かなり難度の高い読解、閲読を学ぶことができる。

現在は、『新实用汉语课本』となり、中身も新しくなっている。

私が中国語学科を教えるために使っているのは、日本人向けに日本語に直し、編集しなおされた『簡明实用漢語課本』である。簡明となっているからには、簡明でないものがあり、この前身となるのは、2冊組の『实用漢語課本 BOOK1』『实用漢語課本 BOOK2』である。これは、底本の『实用汉语课本』の最初の2冊分を日本語に翻訳したものである。

分かりやすいように表1にまとめたので、それを参照されたい。

表1から分かるように、『簡明实用漢語課本』になるまでに、このようなテキストの変遷があった。

日本で出版された『实用漢語課本』と『簡明实用漢語課本』の違いは、2冊であったものが1冊に簡略化されたことである。文法事項についても、若干の省略が認められる。『实用漢語課本』は2冊で計

50課からなるテキストであり、13課以降、各課の課文終了後に閲読が付いている。それが、学習者の少し長い文を読むための基礎力強化になっている。『簡明实用漢語課本』は、この閲読部分がほとんど削除されている。『实用漢語課本』に収録されている閲読部分は、巻末に3課分が補充教材として掲載されているのみである。また、本文においても難しい表現、また長い課文は概ね省略が見られ、練習問題においても置き換え練習などがほとんど省略されている。

表1 テキストの概要

	テキスト名	特徴	出版社
1	实用汉语课本 1～6	1981年～1990年 中国北京語言学院(現:北京語言大学)で出版された外国人向けの中国語を学習するためのテキスト。中国語で単語、文法の説明をしてあり、その後に英語での単語の訳、文法の説明がされている。 外国人向けに作られ、毎日中国語を4時間学ぶことを想定されている。授業数が多いことが前提となっている。 日本語版に相当する部分は最初の2冊で合計50課。	中国 商務印書館
2	实用漢語課本 BOOK1、 BOOK2	1991年 日本の東方書店より、上記の最初の2冊を日本語に訳したもので、日本人向けに出版されたので、日本語で新出単語の訳、文法の説明がされている。 基本的には上記の翻訳であるので、同じく毎日中国語を学ぶことを想定されている。 2冊合わせて50課 閲読なし各課10頁程度 閲読あり各課17頁～26頁	日本 東方書店
3	簡明实用漢語 課本	1998年 日本の東方書店より、『实用漢語課本』BOOK1、BOOK2の簡略版として出版された。同じく日本語で新出単語の訳、文法の説明がされている。 日本人学習者が使いやすいように40課になった。 各課8頁～10頁	日本 東方書店

『实用漢語課本』日本語版を作るにあたって、中国語版にあった漢字の書き方、解説が省略された。確かに漢字圏でない外国人には必要な項目であるが、日本人にはほぼ必要のないものである。

中国語版の初版は1981年、日本語版の『实用漢語課本』の初版1991年、『簡明实用漢語課本』の初版は1998年なので、かなり歴史のあるテキストになる。

## 2. テキストの問題点

現在、このテキストは時代の流れには逆らえず、内容的（基本文法、練習問題など）には必要なことが十分に入っており、いいテキストだと思うが、残念ながら、学習するにあたって、時代にそぐわなくなっている部分が散見される。分かりやすい例をあげれば、使われている単語にあると思う。

単語自体は現在でも使われ、死語にはなっていないのであるが、時代を映し出している。特に電化製品の名前には、時の移り変わりを感じる。現代はスマートフォンの時代になり、もはやガラケーの携帯は持っている人も少なくなり、カセットテープに至っては、直に見たことのない学生もいる。

表2を参照されたい。この表は、『簡明实用漢語課本』内の現代の学生の日常生活で余り見かけなくなってしまう単語の1例である。右側に日本語訳を付けた。学生にとっては、珍しく、分かりにくいものであり、授業中に説明が必要になった単語を挙げた。改めてテキストの単語を調べたのであるが、使われないと断言できるような単語は余りなかった。

表2の中の「1. 画報」は、「それ何?」と言われ、「写真の多い雑誌」と説明するしかなかった。「2. レコード」は、今、実社会で余り使われることはなく、CDという単語は、これらのテキストに載っていない。「3. カセットデッキ」はスマートフォンの録音機能が変わったため、この単語が出てきても「それ何?」と言われたことがある。「4. 交換台」については、同じく毎年、「それ何?」と聞かれる。特に、「7. 写真を現像する」という意味が日本語で説明しても理解されなかったことがある。「写真をプリントする」と説明して初めて理解された。「車掌」という言葉

は知っているも、バスに車掌がいるということが分からない学生は多い。テキスト内で、バスに車掌が乗車している課文がある。

表2 『簡明实用漢語課本』内の学生から質問の多かった単語および現在余り身近でない単語の1例

1	画報 画報
2	唱片 レコード
3	录音机 カセットデッキ (テキストの作られた時は) 今はレコーダーと訳している
4	总机 交換台
5	分机 内線
6	中山装 人民服
7	洗照片 写真を現像する
8	售票员 車掌

そのほか、授業中に本当に驚いた事例がある。

日本語では当たり前であり、単語としての意外性は何もないのに、学生に理解されなかったものがある。「信紙」= 便箋である。これはテキストには出てこないが「信封」= 封筒が出てくるときに一緒に取り上げた。思わずどうやって説明するか悩んだのであるが、「柄が描かれているきれいなレポート用紙のようなもの」で一応の理解は見られた。これはここ2年、毎年起こった事例である。これらの学生の背景は、両親のどちらかが中国人であり、日本で暮らした年数よりも中国で暮らした年数の方が長いというのが共通であった。中国でも、もちろん便箋はある。これは極端な例であるが、このテキストに出てくる単語に関連するものを教える時に、学生との世代間ギャップを感じることは多々ある。ここもテキストが現代と合わなくなっていることの要因の一つかもしれない。

単語だけでなく、中国の発展は目覚ましく、物価の上昇も何倍にもなっている。本文中に買い物をする課(第29課)があるが、その中の価格が時代を感じさせる。茶器セット(急須と湯のみ4個)を買うときのやり取りがあるのだが、本文にはその価格が『三十块零四毛』とある。現在の中国では当然ながら、この値段でそのような品は買えない。

### 3. テキストの使用状況と授業中の対応

目白大学外国語学部アジア語学科中国語専攻が来たのは2005年である。中国語学科に改組されたのは2008年である。このテキストを使い始めたのは、2009年からであり、2017年に至るまで使っている。幸い、教えだしてからの記録が残っているので、表3を参照されたい。(文末参照)\*

この表3から見ると、2009年は1年次の春学期までの学習進度が第16課までと早いペースで進んでいる。その後2011年、2012年も15課までと早くなっている。こちらの授業の進め方もあるかと思うが、最近は大体12課までと落ち着いたペースになった。初めて中国語を学ぶ者にとって、発音の習得に時間がかかり、大変であるため、年度による差は余りでないのかもしれない。毎年11月には中国語検定試験が行われるため、秋学期には、検定試験対策として過去問題を授業中に解くようにしていた。特に2年次の10月は、かなりの時間を検定対策に費やすことが多い。その間は、このテキストは使っていないので、テキストを勉強した授業回数を一覧表にしてみた。もちろん、テキストを使った授業と検定対策の授業だけでなく、学生の苦手な文法、読解の補強の為に、適宜プリント教材を使用している。

40課のテキストを進めるにあたって、1年生、2年生の授業を合わせて大体92回から多い時で112回の授業回数が必要であることが分かった。語学を学ぶのに、ある一定の期間は必要であるということである。

このテキストでは、次のような文法事項が取り上げられている。

表4 「簡明実用漢語課本」の文法事項

課	文法事項
1~3	発音全般。連続する3声の声調変化。
4	“吗”を使った疑問文。形容詞述語文
5	“不”の声調変化。“是”構文(1)。所属関係を表す定語。
6	疑問視疑問文。代詞。
7	動詞述語文
8	文法の復習
9	“一”の声調変化。r化。反復疑問文。連動文。“也”と“都”の位置。

10	“有”構文。介詞構造。
11	数の言い方。定語としての数量詞。二重目的語をとる動詞述語文。
12	時間の言い方。時間を表す名詞や数量詞。“好吗”用いた質問。“是”構文(2)。介詞“从”の目的語。
13	主語、述語、目的語、定語と状語。定語と構造助詞“的”。
14	選択疑問文。兼語文
15	年月日の言い方。名詞述語文。形容詞述語文。動詞の重ね型。動詞、動詞構造および2音節形容詞が定語になったとき。
16	方位詞。存在を表す文
17	動作の進行。“呢”による省略疑問文。主述構造が定語になるとき。
18	疑問文の復習。定語と構造助詞“的”。定語の語順。
19	様態補語。前置目的語。
20	能願動詞
21	動作の完了。語気助詞“了”(1)。
22	“要…了”。語気助詞“了”(2)。主述述語文。
23	動詞述語文(1)。アスペクト助詞“了”と語気助詞“了”。能願動詞。
24	時量補語。概数“几”と“多”。
25	アスペクト助詞“过”。動了補語。
26	無主語文。語気助詞“了”(3)。“从…到…”構文。
27	動作の持続。構造助詞の“地”。“有的…有的…”構文
28	動詞のアスペクト。状語と構造助詞の“地”。動詞の“再”と“还”
29	“比”を用いた比較(1)。“有/没有”を用いた比較。“跟…一样”を用いた比較。差量補語。
30	結果補語。結果補語“好”。
31	結果補語“到”、“在”、“住”。“一…就…”
32	比較の方法4種。語気助詞“吧”“呢”“了”
33	単純方向補語。形容詞の重ね型。“要是…就…”。
34	可能補語。可能補語“下”“了”“动”
35	複合方向補語。“不是…吗”。“又…又…”。
36	“是…的”。存現文。“多么…啊”。“只有…才”構文。
37	補語の種類。副詞の“就”と“才”。構造助詞の“的”“地”“得”
38	“把”構文。いくつかの特殊な“把”構文。“除了…以外”
39	意味上の受身文。“被”構文。疑問代詞の任意指示。“因为…所以…”“不但…而且…”
40	動詞述語文(2)。いくつかの複文の構造。副詞“又”、“也”。

この様に、必要十分な文法を学ぶことができ、そのため、中国語検定4級、3級に合格するための必要な文法事項は、ほとんど網羅されている。授業の際に、1年生で中国語検定4級合格、2年生で3級合格、3年生で2級合格を目標にしてほしいと学生に指導をしている。

単語や課文に、テキストが出版された時と現代との差を感じさせるが、良い点は文法を表4のように体系的に学ぶことができることである。このテキストをメインにして授業を進めると、文法事項が効率よく、漏れることなくマスターすることができる。この点は授業を進める上で安心できる。また、単語が多少、今の学生には身近でないことは否めないが、そのために、学生との会話が弾み、当時の中国、また日本の様子も教えることができ、中国の物価についても触れることができる。特に中国の発展、変化には目覚ましいものがあり、それを説明するいい機会になっている。

今後は、そろそろテキストを替えることも視野に入れなければいけない時期が来ているが、このテキストのように丁寧な文法解説、体系的な学習が出来るものが少なく、なかなか難しい課題である。また、学生にとって価格が安い（税抜き2200円）こ

とも理由の一つである。1年半～2年間、同じテキストを使って勉強するため、コストパフォーマンスは非常に高い。

## 終わりに

同じテキストを引き続き利用するにしても、これからは、単語をより積極的に新しいものに置き換えるなど、工夫の検討が必要である。

目白大学では、ネイティブや両親のどちらかが中国人で日常的に中国語に触れることが多い学生が、他大学よりも多く入学してくる。そのため、そういう学生たち向けに既修者クラスが週2コマ設けられている。それ以外の授業では、大学に来てから初めて中国語を習う学生と一緒に授業を受ける。そのため、テキストの中で分からない点があれば、気軽にクラスメートに教わることができ、環境的にとても恵まれている。

今後も、この目白大学の学生が身近に中国語に触れることができる環境の良さを活かしながら、さらにテキストの内容の取扱いについても検討を進め、より学生に対し積極的に、また活発な活動を促すように指導の検討を続けていく必要がある。

表3 2009年度から2016年度入学の学生に対してテキストを利用して授業した回数

2009年に 入学した学生	2009年1年生		回数	2010年2年生		回数	2年間の 回数 106
	春 第1課から第16課	秋 第17課から第24課		56	春 第25課から第34課		
2010年入学	2010年1年生			2011年2年生			79 注1
	春 第1課から第13課	秋 第14課から第23課	52	春 第24課から第29課	秋 第30課から第38課	27	
2011年入学	2011年1年生			2012年2年生			94
	春 第1課から第15課	秋 第16課から第25課	54	春 第26課から第37課	秋 第38課から第40課	40	
2012年入学	2012年1年生			2013年2年生			93
	春 第1課から第15課	秋 第16課から第26課	60	春 第27課から第37課	秋 第38課から第40課	33	
2013年入学	2013年1年生			2014年2年生			93
	春 第1課から第12課	秋 第13課から第22課	60	春 第23課から第34課	秋 第35課から第40課	33	
2014年入学	2014年1年生			2015年2年生			112
	春 第1課から第12課	秋 第13課から第20課	60	春 第21課から第32課	秋 第33課から第40課	52	
2015年入学	2015年1年生			2016年2年生			107
	春 第1課から第9課	秋 第10課から第19課	58	春 第20課から第30課	秋 第31課から第40課	49	
2016年入学	2016年1年生			2017年2年生			92
	春 第1課から第12課	秋 第13課から第24課	56	春 第25課から第38課	秋 第39課から第40課	36	

注1 この年だけ、担当している授業科目が変更となり、6Bの授業は週1コマとなったため、授業数が極端に少なくなっている。

《参考文献》

刘珣 邓恩明 刘社会 编著 (1981) 『实用汉语课本 第一册』北京語言学院 商务印书馆  
 刘珣 邓恩明 刘社会 编著 (1981) 『实用汉语课本 第二册』北京語言学院 商务印书馆  
 刘珣 邓恩明 刘社会 编著 (1986) 『实用汉语课本 第三册』北京語言学院 商务印书馆  
 刘珣 邓恩明 刘社会 编著 (1987) 『实用汉语课本 第四册』北京語言学院 商务印书馆  
 刘珣 邓恩明 刘社会 编著 (1989) 『实用汉语课本 第五册』北京語言学院 商务印书馆  
 刘珣 邓恩明 刘社会 编著 (1990) 『实用汉语课本 第六册』北京語言学院 商务印书馆  
 (受付日：2017年10月31日、受理日2017年12月18日)